

【研究課題】

COVID19 感染症流行による生活様式の変化が肺血栓塞栓にもたらした影響の検討

研究期間：2021年4月1日～2021年12月31日

行政解剖例において COVID-19 感染症流行が肺血栓塞栓症にどのような影響を与えたのかについて COVID-19 流行以前(2019 年 36 例:以下 A 群)、以後(2020 年 42 例:以下 B 群)の病態を比較した。

疫学的特徴として平均年齢は A 群で 58 ± 3 歳、B 群で 56 ± 3 歳。PTE リスク因子の割合(A 群・B 群)は、女性(47%・62%)・肥満(64%・40%)・精神疾患(28%・26%)・癌(11%・12%)・外傷(14%・2%)・入院中または退院後(11%・7%)・その他のリスク(17%・29%)だった。B 群における COVID-19 流行に関連する生活様式リスクとして在宅勤務が 2 例(5%)みられたが両例とも他の PTE リスク因子を合併していた。COVID-19 検査は B 群 4 例で実施されいずれも陰性だった。

病理学的特徴(A 群・B 群)は、右室肥大(47%・40%)、PTE:急性(47%・57%)・反復性(53%・43%)、下肢静脈血栓(DVT):両肢性(50%・40%)、片肢性(44%・33%)、その他(2%・26%)だった。

検討の結果、所々違いがみられるものの、発生件数および PTE リスク因子は AB 群間で際立った違いはなく、B 群における COVID-19 関連リスク因子の発生は 5%に止まった。また症例の病理学的特徴についても AB 群間で著変はなく、検討した 2 年間においては COVID-19 感染流行に関連する特徴は見いだされなかった。しかしながらリスク因子の検討に際しては上記のような疫学的視点・病理学的視点を多角的に捉える必要があること、また現時点においても流行が継続し・ワクチン接種や流行株の変異などリスク因子の変動があることから COVID-19 感染流行と PTE 発症との関連の有無については継続的な検討が必要と考えられる。